

86 東京法学院第十二回卒業式・学事報告他

〔法学新報〕第七六号 明治三十年七月二十日

○東京法学院卒業式

同院にては本月十五日午後二時より第十二回卒業証書授与式を挙行せり先づ幹事奥田義人氏より同院の成績及将来の施設に対する報告的演説あり夫より院長菊池武夫氏英邦両法学科卒業生二百〇五名に一々証書を、優等生に褒状を授与し終て卒業生に対する心得を演説し次て清浦司法大臣登壇して一席の演説を試み又川島龜夫氏は院友総代として祝辞を朗読し右了て講師院友卒業生一同庭前に於て撮影を為し夫れより別室に於て立食の饗応あり一同歎を罄して散会したるは午後七時前後なり当日来会したるもの無慮六百有余名にして其来賓の重なる者は清浦司法大臣、朝鮮代理公使韓永源高木民刑局長、中村大審院部長、杉浦重剛、奥宮、森の両司法書記官、前田控訴院部長永富謙八の

諸氏其他朝野の名士数十名なりしと云ふ  
清浦司法大臣及菊池院長の演説は速記の儘之を論説欄内に掲ぐ  
又奥田義人氏の報告は東京法学院の学事一班を示さんか為めに  
左に記す

○東京法学院学事一班

- 一 創立年月 明治十八年七月
- 一 学科目 法律学及経済学
- 一 修業年限 三ケ年（但研究科高等科ヲ含マス）
- 一 学級別 一、二、三年級
- 一 講師（現在） 五十八名
- 一 生徒（現在） 千〇七十四名
- 内 邦語法学科 八百七十五人 英語法学科 九十三人
- 研究科 三十七人 高等科 六十九人
- 一 卒業生全員 二千〇〇二人
- 内 創立ヨリ廿九年マテノ分 千七百九十七人
- 三十年七月 二百五人（英九人、邦百九十六人）
- 一 卒業生職業別
- 1. 弁護士 二百三十六人
- 2. 判検事 百廿五人
- 3. 高等官 廿四人（但文武官外交官ヲ含ム）
- 4. 判任文官 百八十余人
- 5. 会社支配人、銀行々員等 七十余人
- 6. 新聞雑誌記者 十四人
- 7. 代議士 十一人（貴族院議員一名）

8. 公証人、執達吏 七人

(備考) 四、以下ノ分ハ院友会届出ノモノニシテ其他ハ知ル

ヲ得サルニ付キ省略シタルモノナリ

次学年ニ於ケル拡張ノ要項左ノ如シ

- 一、英語法律科ヲ拡張スルコト
- 二、英語及ヒ漢学ヲ奨励スルコト
- 三、海外留學生ヲ設クルコト
- 四、給費生ヲ設クルコト

以上は当日奥田氏の報告したる要旨を示したるものなり院友給代川島龜夫氏の祝辞卒業生総代森榮氏の答辞左の通り也

祝辞

維時明治三十年七月十五日、東京法学院第十二回卒業式、不肖川島龜夫代院友、謹告卒業生諸君、諸君受想到周密之教授、孜孜黽勉以研究斬新之法理、茲卒業、余輩祝之且謝講師諸君之勞、併喜可親愛畏敬我院友益加多也、自今後与諸君奉為兄為弟之實、同枝相連、同情相憐、交誼親密、欲以厚同門之契、豈不一言而可乎、

諸君在本院、費千余之日子、鍊磨研精、所得譬之刀劍、余輩信其鍛造光芒電閃夏猶寒之利刀、又信養成能犯礮丸、陷堅陣、縱橫搏擊以震動社会之胆力才幹、此刀也、可以為護身之用、可以誇脚党、足以風靡五洲、佩服之則可以穰妖凶、提之橫行則可以威天下齋之婦閭里則父兄艸童歡迎候視於脚門、羨望欣

喜可不措、以之応科則可及策、応用之則判正邪当否、断是非曲直、鏘銖之差又可發見、摘發姦邪譏誣之徒、制裁得宜、見秩序整々、試之外交則談論風発、雄弁快舌、拆理精緻而無寸隙之可乘、教使臣卷舌能無荅、百万之精兵、千百之幢幟無名用之、非所謂縱橫搏擊震懼五洲者乎、守家則家治、理國則國威振張、其利器存此一刀、社会待諸君速卒業、佩服此利刀來理難局者也、有文官高等試験、於判檢事於理事於主理於弁護士於外交官、随所選格各可応其科、又可雄飛実業界、与諸君共遭遇此盛世、前途多事多望、信無古所謂空抱宝玉而泣、懷名刀而屈之不幸也、今也、諸君得此宝刀、去本院、或有退守家者、或有進渡官海者、或有従事実業者、公私之業務自是益多事多端也、所逢盤根錯節、皆試其器之好材料、而所以弥銳利器也、諸君其努力焉、得器者易、応用者難、歳多之困難時迫諸君之身辺、決非可苟且放逸之時也、宜發其大抱負、奔馳競争場裡、而不撓不屈、發揮其胆力与才幹、行用利器、益使本院增光彩高品位、是諸君所以報本院之道、又諸君之責務也、何碌々妄伍凡庸、無為而可終乎、又必勿学為其器却自損之身之愚、予輩為邦家偏祈諸君之健康刮目以見諸君之举措、敢一言代祝詞。

川島龜夫

答辞

明治丁酉七月十五日東京法学院卒業証書授与式ノ典ヲ挙ケラル不肖幸ニ其席ニ列シ院長閣下ノ懇篤ナル訓諭ヲ拜受ス光荣何ニ似シ是レ上ハ 叡慮ヲ学ニ注カセラレ下ハ本院講師諸賢

ノ薰陶厚キニヨルナリ然リ而シテ斯学ノ深長ナル実地ニ利用  
スルノ困難ハ纜ヲ解キテ大洋ヲ望ムノ感アリ生等今日ノ光榮  
アリト雖モ漸ク其端緒ヲ開クニ過キス其前途尚曠遠限リナク  
生等ノ勉メ茲ニ終レリトナス能ハサルナリ顧フニ帝國三十年  
ノ過去ハ進歩ノ大波瀾ナリ紀元爾來複雜之潮頭ナリ時變ノ最  
大ナル者ナリ特ニ老大国ヲ覚醒シタルノ影響ハ万国ヲシテ世  
界ノ一強國タルコトヲ認メシメ今ヤ対等ノ条約モ亦其実施將  
ニ近キニアラントス吾人國民タルモノ豈ニ唯ニ一小帝國國民タ  
ルノ志想ヲ有スルニ止ルヲ得ンヤ外交ニ内治ニ治政ニ各々其  
發達進歩ヲ計リ大日本帝國ノ価値ヲ損セサランコトヲ勉メサ  
ル可ラス然ルニ現時ノ國勢果シテ如何國民ノ元氣果シテ如何  
顧フテ茲ニ至レハ軫タラサルヲ得ス生等不肖ナリト雖  
モ確然不拔之志奮勵研磨之業怠ラス其学ヲ所他日ノ大成ヲ期  
シ是ヲ國家ニ利用シテ以テ講師諸賢ノ高恩ニ報ヒ本院ノ名聲  
ヲ万国ノ上ニ轟カサンコトヲ希望シテ止マス不肖榮第十二回  
卒業生ニ代リ蕪辭ヲ述ヘ答辭ニ代フト云フ爾リ

明治三十年七月十五日

東京法学院第十二回卒業生總代

森 榮